
悪鬼姫

夜桜 野鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪鬼姫

【Nコード】

N8413X

【作者名】

夜桜 野鈴

【あらすじ】

今回は割りとダークなお話。

しかし、砂糖の入れ忘れは忘れていません。

自らを『万能の子』の寄代とするため人を喰らう運命を背負ったテノ。

テノの喰い孕むことの運命を知っていつつも大切に想うソラトとテノの狂った信頼の味は甘美なものでしょう。

試験的な比喩法も多々使用してみました。
紅い想いをどうぞお楽しみください。

（前書き）

作者はグロイのは嫌いです。
でも、イラっとして書きたくなる。

「ああ……退屈だわ」

もげた腕を持ち上げ、者から物に成り下がった『ソレ』を遊ぶ。
暫くして飽きたのか、片腕のみで『ソレ』を投げる。
びしゃりと醜悪な音を立て柘榴色の内容物が辺りに飛び散る。

「お嬢様、あまりそういうことはしないでください」

従者らしき少年が薄暗がりの方にある戸から現れる。

口では窘めているが、『ソレ』に対する表情や態度は明らかに冷め切り、端的に言うなら興味の色さえ無い。

「あら、ソラト。来てくれたのね」

先の退屈に埋もれた表情と打って変わり、黒蓮が花開くように明るい表情へと変わる。

「ええ、それが役目であり、僕の存在意義ですから」

ソラトと呼ばれた従者の言葉を最後まで聞くが早いか、少女の表情が一気に曇天の空模様と化す。

「そう……。やはり、お父様の命ですね」

「そう悲観されなくてください。先のは従者としての社交辞令です。王の命無くとも貴女を迎えに赴きますよ。王位継承第四位、テノ・ル・アレグー口様」

恭しく頭を下げ従属の証明を表す。

「ソラトのそういう社交辞令が本気が分からない態度、嫌いだわ」
プイツと他の方を向き露骨な嫌悪感を示す態度をとるが、テノ自身はそんなつもりは一切無い。

二人だけの密接な間柄だからこそするアピールなのだ。

「これは手厳しいです。それより——」

と、上着の胸ポケットから取り出したハンカチでテノの口元を拭く。

「また、『喰』べたんですね？」

拭ったハンカチには少し時間が立ち、劣化した苺ジャムのような血がついていた。

「あれほど生の人を食べないようにと忠告しておいたのに駄目じゃないですか。」

家畜とは違い新鮮でも食中毒は引き起こしますよ？」

「んんっ……。私は『人』じゃない、『鬼』よ」

昔々の人は他人の長所を得るには、他人を喰い、自らの血肉にして取り込めると考えたらしい。

テノの国——特にアレグーロ王家はその考えを色濃く取り入れている。

「私の体の心配してくれるのはソラトだね。どうせ私は万能の子の宿代でしかないのに——」
「お嬢様」

主の言葉を最後まで聞かず遮る行為は、従者としては問題のある行為だろう。

しかし、ソラトにはそんなことは関係無くなっていた。

止めないと、テノがどこか遠い所へ、自分から離れてしまう。そんな錯覚がしたから。

「お嬢様が、他人の血肉を喰べ、腹に宿す子の糧、『万能の子』の糧にするべく鬼だとしても、僕は貴女の従者です。」

だから、僕が貴女を嫌うなんて思わないでください」

「ソラト……？」

テノは地獄に薔薇を見つけた様な表情をしている。

「いえ、出過ぎた真似を致しました。申し訳ありません、処遇は何なりと」

ソラトも我に返り、自分が従者失格の行動を行ったことに気がついた。

声は落ち着いていたものの、気の短い貴族なら間違いなくその場で斬首だろう。

テノも気の短さで言うなら隣国の独裁者に引けを取らない。

「ええ、少しお痛が過ぎたわ。だから——」

——「帰りは手を繋いで帰りたいわ」

「お……嬢様？」

きょとんという擬音では形容出来ない程、驚いた顔をしていただろう。

いくら仲の良い主と従者と言えど、歩を弁えない態度は叱咤される。その叱咤さえなかったのだ。

「さあ、手をとって。ソラト」

ソラトは白い手袋を嵌めた手を、まだ生乾きの血油でぬめるテノの手にそえる。

そして、そのままソラトは跪ぎ血に塗れた手に口づけした。

「な、何をやっているの!？」

「貴女へ永劫の忠誠をお誓いします」

それは、薄汚れた偽善で覆わない、ソラト自身の本心だった。

「誰もそこまでやれとは言っていないわ……。でも、そこまで言うなら一つだけお願いするわ」

白と紅が交ざる様に絡み、握られた手に、柔らかく、相手を確認するように力が入る。

「夕御飯は貴方の好物のポトフが食べたいわ」

(後書き)

気がつけば醜悪なグロに。
でもハッピーエンドは譲れなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8413x/>

悪鬼姫

2011年11月15日01時31分発行